生活楽しむ「道具」

スマホ、タブレット

県内事情

急速に普及しているスマートフォン(多機能携帯電話、スマホ)やタブレット端末。若い世代を中心に利用者が多いが、「介護が必要になる可能性がある高齢者にとってこそ、役に立つ道具」と指摘する専門家もいる。スマホやタブレットを活用して生活を楽しんでいる県内のシニアを取材した。

孫と〝会話〟や写真整理

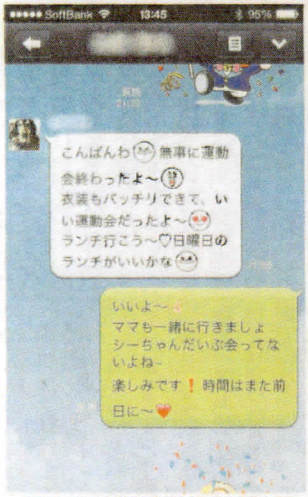
専門家「要介護時にも利便性」

◀ひ孫の写真を待ち受け画面にしたスマホを使って、家族や友人と交流している西山タエさん＝熊本市

「3連休にランチに行こう」。熊本市西区池田の西山タエさん(68)は、スマホの通信サービスの一つ「LINE(ライン)」を使って、同市に住む孫娘(25)と日常的に文字での〝会話〟を楽しんでいる。写真や動画、イラストなども送り合う仲。西山さんは「母親にも言わない彼氏のことまで話してくれるんです」と笑う。

西山さんは今年1月、初めてスマホを購入。50代の友人が、スマホでインターネットを使って調べ物をしたり、買い物をしたりしていたことがきっかけだった。

最初は電話をかけるだけでも苦労したが、今では県内外の孫らとラインなどを使って連絡を取り合う。趣味で作ったビーズや粘土作品を、スマホのカメラ機能で撮影してネットの交流サイト「フェイスブック」に掲載。スマホでドラマを見たり、地図機能を使って外出したりもする。



西山さんが孫とやりとりしている「ライン」の画面

最初は若者向けの道具と思っていた西山さんだったが、使っているうちに便利さが分かり、手放せなくなった。「次は好きな演歌を取り込んで、聞きながら散歩したい」と、すっかりスマホのとりこになった様子。

同市西区花園の塩田義治さん(85)は、タブレット端末の「iPad」を手に、週1回パソコン教室に通う。劣化していた戦時中の写真や家族写真を、タブレットに取り込んで整理している。「まだ使い方で分からないことも多いが、いつか自分史を完成させることが目標」と意欲的だ。

▲パソコン教室でタブレットの使い方を習う塩田義治さん＝熊本市

塩田さんと西山さんが通う「わく楽パソコン教室」(同市)の田中好明代表(56)は、「画面が大きいタブレットなら、視力が衰えた高齢者にも操作しやすい」という。

シニア市場に詳しい東北大の村田裕之特任教授(51)は、高齢者のインターネット利用率について、2025年には70歳で70%、80歳でも51%に上ると推計。「もし体が弱ったり、寝たきりになったりした場合でも、ネットを使うことができれば、家族との連絡や自宅での買い物など、日常生活に役立つことも多い」と、タブレットなどの活用を促す。

村田特任教授は「まずは身近で使っている人に相談した上で、操作方法などを教えてくれる販売店を見つけるといい」と助言する。(井上直樹)